

# 第1回 国際政治・外交論文コンテスト

## 自由民主党 幹事長賞

### アフリカにおける日本の国際貢献のあり方についての一考察

田中 麻衣子

国際貢献とは人と人との関わりであるが故にその選択肢は実に多様である。とはいえ国家間レベルで考えられる支援策としてはいくつかの選択肢に絞り込むことができるであろう。政府開発援助(ODA)もその選択肢のうちの1つであり現地住民の「内発的発展」を支援するものとして最も活用されているものである。ここではこの ODA の現状を批判的に考察しながら、アフリカという限定した地域に関係する事例を取り上げたい。

国際貢献は今や世界中で行われており、現在にいたるまで先進国から途上国へ様々な開発政策が行われてきた。そして1992年にブラジルで開催された地球サミットを通じ、人間開発という概念が国際的にも幅広く受け入れられ今や定着した概念となりつつある。先進国の開発援助の基本理念も、以前までの経済成長重視の開発から人間中心の開発へとシフトしつつある。このように、現在国際貢献に対する関心は世界的に高まっており勿論日本においても例外ではない。「トップダウンではなくボトムアップ」で「現地に根ざした」貢献を目指すという概念が世間に定着し、今やこのことに異論を唱えるものはいないであろう。しかしその理念とは裏腹に、世界各国の最上位20%と最下位20%の国の所得格差をみると1960年は30:1、1991年は61:1、1994年には78:1と広がる一方である。これまでに国際会議で掲げられてきたスローガンや打ち立てられてきた計画は素晴らしいものであるが、それらの実行となると多様な現地状況により成功することのほうが多く、先進国と途上国の格差は依然として大きいのが現状である。特にサハラ以南アフリカ諸国における経済格差は顕著であり、豊富な資源を有しながらも民族の多様性や植民地としての抑圧された歴史等を背景に、未だ貧困から抜け出すことができないでいる。国連が分類した「後発発展途上国」(通称最貧国)47国のうち32国はアフリカ諸国であり、世界の難民の三分の一弱をアフリカが占める。世界のどの地域より低い教育水準も、貧困からの脱却、人口抑制を厳しくしておりこれらの悪循環がアフリカの苦しみを一層深めている。このような複雑な問題を抱えるアフリカとの関係、そして現段階での日本の国際貢献について思うところを、さらに実際の現地調査で得た経験を踏まえた以下に述べていきたい。

日本とアフリカとは距離的にも文化的にも遠い故に活発な交流が行われているとは言い難い。先日東京で開催されたTICADⅢについても大々的にメディアで取り上げられることはなくアフリカ問題への国民の関心の低さが伺えた。民間企業もアフリカから次々と撤退しているのが現状である。このように国民にとっては身近とは言えないアフリカとの関係ではあるが、サミットで対アフリカ支援策が採択されるなど国際的にはアフリカ支援の機運は年々高まっており、日本が国際貢献を考えていく上で避けては通れない問題となっている。実際に政府レベルでは、3回に

わたるTICADの開催に加え日本の対アフリカODAが過去10年余りに毎年度10億ドル規模、日本のODA全体の10%程度と一定の水準で実施されているというように、アフリカとの交流を積極的に行っているといえる。とはいえこれらの交流においてまだまだ人的交流は少なく、特に民間レベルでは上述したように活発な交流が行われているとは到底いえない。日本の援助がしばしば「顔の見えない援助」といわれる所以である。距離的に遠く文化的にも異質な思いが抱かれるアフリカとの関係を促進するためには先ず、国際貢献の担い手さらには国民一人一人が「実感としてのアフリカ」との関係を考えていくことが必要不可欠である。概念として確立したことを実践するには一人一人が実際に経験していくことが一番有効なのだが、アフリカとの関係を考える上では現実的ではない。そこで私が提言したいことは、学界とりわけ現地調査を必須としている文化人類学界との意見交換や共同作業などの連携、そして資金的に困難な状況に置かれている若手の日本人アフリカ研究者への研究助成である。現実問題としてアフリカでの現地調査には多額の資金が必要でありこの足を踏む若手研究者ないし大学院生は多い。また政府レベルでもアフリカ支援のためにゼロから適格な人材を養成するためには時間と資金が必要である。現在の開発現場に求められている社会分析を行い得る人材の養成にはさらに労力がかかるでしょう。この両者の間につながりを持たせることで相乗効果が得られることが期待されるのである。若手の研究者はすでに知識(理論+調査手法)、発表の場(論文+学会発表)、組織(学会)を有している。さらに開発のためではなく、純粋な学術的興味に研究の端を発しているので現地住民との利害関係のない交流が期待でき、国際貢献の現場において重要な現地住民との信頼を得やすいと考えられる。現在、開発社会学や開発人類学等さらに両者をつなぐコーディネーター役割を持ち得る研究が増加しているので、これらを上手く組み合わせることも可能である。現地滞在経験のある若手を積極的に取り込めるよう、国が彼らを就業させるためのポストを用意することで、ODAが実際に行われる開発現場で活躍できる優秀な人材の育成が効率良く促進されるだろう。

私がこのように開発分野と学会との連携を強く望むようになったきっかけは2003年の夏に西アフリカのカメルーンで行った現地調査での経験である。予てから国際貢献に関心があり、近い将来直接的に実務レベルで携わって行きたいと考えていた私は、現地調査を重視する文化人類学的手法に興味を持ち現在大学院でこの分野について学んでいる。そしてそれまでに日本で学んだ概念を基に国際貢献について自分なりの考えを持ち、またその理解をより深めるため、念願の現地調査に臨んだ。カメルーンのとある村での2ヶ月半にわたる調査である。研究内容としては伝統医療を手がかりとしたアフリカ伝統社会における世界観に関する文化人類学的研究であったが、第一義的な目的はアフリカ伝統社会に暮らすことでその価値体系に関する知見を深めるとともに、そうした価値体系を有する社会とのこれからの関係の構築の方途を考察することであった。しかし実際に現地を毎日過ごす中で、日本の中でどれだけ異文化に暮らす彼らを理解したつもりでいたとしても実際に異文化を体験しない限り多かれ少なかれそこにはギャップが存在するのだ、ということを感じた。私は無意識のうちに「アフリカ=途上国=貧困=助けられなければならない」という図式を頭の中に描いてしまい、アフリカの状況を数値や用語では定義できても具体的な実感として捉えることができていなかったのだ。彼らが生身の人間であることは自明のことであったはずなのに実際に共に笑い、怒り、歌い、踊る中で漸く彼らを実感を伴ったかたちで再認識することができたのである。私にとり「助ける対象」としての彼らが「友人」に

変化したことで本当の意味での概念を理解できるようになった。そしてこの経験から、人は異文化の中に放り込まれなければ実感としての他者を認識することができないのであり、国際貢献の現場で働く者は現地での生活という「通過儀礼」を経ることが必要不可欠だと強く思うようになったのである。このことは決して現地に暮らす者にしか現地のことはわからない、という意見を肯定するものではない。しかし国際貢献を行う中で現地の状況を少しでも理解しようと努力するのであれば、海外旅行が手軽に可能な現代において現地に足を踏み入れることはそれほど困難ではない。ましてや効率的に国際貢献を進めていくため、限られた時間や枠組みの中で結果を出さなくてはならない開発分野に文化人類学的社会分析法を取り入れようとするならば現地経験をを持つ研究者を担い手に起用するという考え方は至極普通ではないだろうか。

私の滞在していた村は電気も水道もなく夜はランプや月明かりを頼りに生活をしてきた。しかしそのような状況の中でも現地の人々、つまり私の友人達の向学心は衰えることがなかった。ランプの明かりの中、いつ使うかも分からない日本語を毎晩一生懸命に学んでいた彼らにとり、日本は夢の国であり憧れの国だという。私という日本人が短期間現地に滞在し共に生活を送ったことで彼らの中で日本という国がいつか訪れてみたい身近な国と変化したのである。日本でどれほど熱心に現地の開発計画が行われようと、多額の宣伝費を使い現地の情報媒体を利用しようとも、現地の人々が最も日本を身近に感じる時とは、彼らが実際に友人としての日本人を持つ時なのだ。このように現地に赴くことは、調査者自身が現地の社会状況に精通できるだけでなく、必ず現地住民に日本への興味を持ってもらうきっかけにもなる。そしてこのような心の交流は現地調査を長く行う研究者は等しく経験しているだろうし、この絆は何よりも強い国際貢献への原動力となる。心の交流を経験した者達が国際貢献の現場に頻繁に関わることができれば、おのずと「顔の見える援助」が行われることになるだろう。限られた予算や枠の中で最大の成果をあげるためには既存のもの有効利用と効率性を追求するべきである。しかし綿密な戦略とともに忘れてはならないことが、実は友人の喜ぶ顔が見たい、というような純粋な思いが人を動かす力である。「顔の見える援助」とは何も日本という「顔」を認識してもらうだけでなく、現地の人々一人一人を認識し彼らの「顔」がみえるようになるということでもあると私は思う。

以上のように日本の国際貢献のあり方、とりわけアフリカ地域での貢献のあり方について自らの経験を踏まえ述べてきたのであるが、最後にここで次の2点を提言しておきたい。それは、1) 実体験に基づく人的交流の実現と、2) 当地の社会体制や価値体系に明るく文化人類学の素養を持つ研修を積んだ日本人コーディネーターの緊急な育成、である。冒頭でも述べたように、国際貢献とは人と人との関わりであり、またそれが故に常に変化をし続けるものである。そこに生ずる諸問題に対処する唯一の手段は単なる机上の開発理論でも、数値化されたデータや統計資料に基づいた完璧な計画でもなく、地道なそして絶え間ない現地との人的交流の経験であると私は考える。少なくとも、アフリカ地域における国際貢献を考える上ではこれらの提言は必要不可欠であると断言できる。生き様を世界に対してしめしていくことに他ならない。